

令和 5 年 5 月 15 日現在

機関番号：32610

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K19803

研究課題名（和文）精神障害者の配偶者に対するライフステージの変化に伴った支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of the support program accompanied with the change of the life stage for spouse of people with mental illness

研究代表者

前田 直（Maeda, Sunao）

杏林大学・保健学部・助教

研究者番号：80723494

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、精神障害者と生活を共にする配偶者を対象として、ライフステージの変化に伴って配偶者がどのような困難やニーズを抱えているかを明らかにし、支援プログラムを構築することを目的とした。精神障害者の配偶者は日常生活において多くの困難を抱えていたが、症状への対処、生活の維持、余暇を過ごす等の作業にバランスよく従事することで、生活の質が改善する可能性が見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神障害を持ちながらも結婚し、所帯を持つ人は増えているが、配偶者に対する支援は十分ではない。本研究では、配偶者の抱える困難と支援ニーズを明らかにした。支援者は、配偶者の生活の全体像を理解することができ、支援方法への示唆を得られると考えられる。また、全国で取り組まれている配偶者の立場の人が集まるピア・ミーティングの質の向上、活動の拡大につながることを期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the difficulties and needs of spouses who live with a person with mental illness, and to establish a support program. Spouses of people with mental illness had many difficulties in their daily lives, but it is possible that their quality of life can be improved by engaging in well-balanced tasks such as coping with symptoms, maintenance of life, and spending leisure time.

研究分野：リハビリテーション科学

キーワード：精神障害 家族支援 配偶者 結婚 ケアラー

## 1. 研究開始当初の背景

精神障害があっても、地域生活を営みながら結婚し育児をする人が増えている。しかし妊産婦の自死や子ども虐待のハイリスク要因として精神疾患があることが指摘されており、支援は十分とはいえない。精神障害者と生活を共にする配偶者は、精神疾患の重大な影響を最も身近で体験する存在であり、配偶者自身が疲弊した状況にあることも多いが、今までその支援方法が検討されることは無かった。家族が高い感情表出の状態にある場合、そうでない場合に比べ再発率が高くなることが指摘されており、配偶者支援の確立は当事者支援の観点からも急務である。申請者は、家族会の全国調査を通じて配偶者が抱える問題の概要を明らかにしたところ、多くの配偶者が当事者からの身体的暴力や精神的暴力、自殺企図を経験していた。また、配偶者自身が夫の立場の場合は60.5%、妻の立場の場合は70.7%が「うつ病や不安障害の可能性が高い」とされており、配偶者自身も生活に深刻な問題を抱えていることが明らかになった。一方で、配偶者が抱える悩みは人生を通じて常に一定ではなく、ライフステージの変化によって、必要な支援は異なる。しかしこうしたライフステージの変化に伴って生じる生活への影響については未だ十分に明らかにされておらず、家族支援を実践している支援者からは具体的な援助方法が分からず困惑しているという声を聞く。配偶者固有のニーズに基づく支援のあり方を検討、設計し、普及させていくことが求められている。

## 2. 研究の目的

本研究では、精神障害者の配偶者がライフステージの変化に伴ってどのような困難を抱えているか、どのような支援ニーズを抱えているかを明らかにし、支援プログラムを構築することを目的とする。ライフステージの変化に伴った体系的な支援を提供することにより、配偶者の感情表出を低下させ、障害当事者の再発や増悪の予防へと展開できることが期待される。

## 3. 研究の方法

### (1) 配偶者の困難と支援ニーズ

配偶者が抱える困難と支援ニーズを明らかにすることを目的とした。家族会の全国組織である全国精神保健福祉会と共催し、関東地方で配偶者を対象とした支援に取り組む「精神に障害がある人の配偶者・パートナーの支援を考える会」と、同会と協力関係にある北海道の家族会の参加者98名を対象に、自記式質問紙調査を実施した。質問紙には、配偶者の消耗感をみる尺度としてのPinesのバーンアウト・インデックスと、ソーシャルサポートの評価としてSarasonらが開発したソーシャルサポート測定尺度日本語版(Social Support Questionnaire)を用い、加えて生活上の困り事及び支援ニーズに関する自由記述を求めた。

### (2) 配偶者の体験

配偶者の体験を記述することを目的とした。精神障害者を配偶者に持つ夫5名と妻5名にインタビュー調査を実施し、逐語録を質的記述的に分析した。

## 4. 研究成果

### (1) 配偶者が抱える困難と支援ニーズの評価

自記式質問紙調査では、63名(回収率64.3%)からの回答が得られた。対象者のうち精神的に安定し心身ともに健康である者の割合は27.0%に留まり、ソーシャルサポートは不足していた。中でも、子どもを持つ配偶者は、バーンアウト・インデックスが有意に高値だった。生活上の困り事に関する自由記述からは、【精神的・身体的苦痛を感じ、配偶者の生活に影響が出る】【病気の症状からくる問題への対処が難しい】【相談先や支援が乏しい】【経済的な問題が生じる】【子どもの養育に影響が出る】の5つのコアカテゴリが生成され、支援ニーズに関する自由記述からは【相談支援】【訪問型支援】【ピアサポート】【経済的問題に対する支援】【医療機関からの支援】【子どもの養育に対する支援】【家族が受けられるカウンセリング】【宿泊・入所型支援】【障害や疾病に対する啓発】【日中の居場所づくり】【当事者の就労に対する支援】【家族の働き方への理解と支援】【通院支援】【研究者への支援】の14のカテゴリが生成された。配偶者は多くの困り事を抱えており、積極的な支援を必要としていることが明らかになった。

### (2) 配偶者の体験

インタビュー調査からは、配偶者が日常生活において【症状に対処する】【生活を維持する】【余暇時間を過ごす】【ライフイベントに伴う作業をする】という4つの作業に従事しており、これらの作業への従事に伴って【何もかもうまくいかない】【救われ、落ち着く】【配偶者を大切に思う】【楽しいと感じる】という主観的な経験をしていた。配偶者は、日常生活の中で従事する4つの作業のいずれかに偏りや不適合を起こし、バランスを崩してしまったとき、【何もかもうまくいかない】と感じることがあった。医療や社会資源等のフォーマルな支援、親族や友人等によるインフォーマルな支援を受けることは、【救われ、落ち着く】経験につながるがあった。

た。全ての対象者に、【配偶者を大切に思う】気持ちがあり、生活の中で【楽しいと感じる】経験をしていた。

### (3) 配偶者に対する支援プログラムの構築

自記式質問紙調査およびインタビュー調査の結果から、配偶者支援に当たっては、配偶者の話を丁寧に聞き、生活状況を理解することが重要である。

精神障害を持つ人の配偶者に対する支援プログラムには、専門家による個別的支援と、同じ立場の人で体験的知識を共有するピア・ミーティングの実施が有効であると考えられた。

専門家による個別的支援では、疾病や障害・社会資源等に対する正しい知識の提供、配偶者自身の生活状況の評価、心理教育が必要である。支援に当たる専門家には、配偶者が抱える困難と支援ニーズに関する全体像を理解したうえで、個別的な相談に丁寧に対応していくことが求められる。こうした支援の実施にはある程度の時間(60分~90分程度)を確保する必要があるが、まとまった時間が取れない場合には、複数回に分けて実施することも可能である。

ピア・ミーティングでは、精神疾患の症状への対処方法や、配偶者自身の生活に対する振り返り、楽しいと感じられる作業の意識付け、ライフステージの変化に伴って生じる作業への準備状況を確認すること等を、互いに学び合うことが有効であると考えられる。ピア・グループの参加人数は、対面式では20名程度、オンライン形式では10名程度までが望ましく、それ以上の参加ではグループが機能し難くなる可能性がある。実施時間は3時間程度とし、途中で適宜休憩を取る。ピア・ミーティングの進行は、グループのコア・メンバーが担当するが、3名以上の複数体制で行うことが望ましい。コア・メンバーが十分に育っていない状況では、専門家が補助的に関わることも考えられる。ただし、ピア・ミーティングでは配偶者の体験的知識を共有することが最も重要であることを意識し、専門家による教唆的な内容にならないよう留意することが重要である。

### (4) 配偶者に対する支援プログラムの展開

配偶者支援プログラムは、関東地方で配偶者を対象とした支援に取り組む「精神に障害がある人の配偶者・パートナーの支援を考える会」のピア・ミーティングで実践した。

2019年度は、配偶者を対象とした対面式のピア・ミーティングを4回実施し、延べ70名が参加した。しかし、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、対面での活動が困難となった。そこで実施形式をオンラインに変更し、ピア・ミーティングを展開した。オンラインでの取り組みでは、これまで参加が難しかった遠方の者が参加しやすく、地域を超えた交流が生まれるなどのメリットがあった。一方、オンラインでは多人数での話し合いに技術的な難しさが伴い、1回当たりの参加人数を10名程度に制限する必要があった。そのため、ピア・ミーティングの実施回数を増やして対応した。2020年度は8回の開催で、延べ83名が参加し、2021年度は6回の開催で延べ69名が参加、2022年度は8回の開催で延べ80名が参加した。

オンラインでの取り組みが拡充する一方で、対面での支援に対するニーズも根強くみられていた。2021年度以降はオンラインでの活動に継続的に参加していたメンバーを中心に、北海道、大阪府、福岡県等で対面式の活動が再開された。更に、2022年度に石川県で新たなグループが立ち上がる等、配偶者支援の活動は広がりをみせている。

配偶者を対象としたピア・ミーティングは、誰にも相談することができず孤立していた配偶者同士をつなぎ、互いに語り合うことで、生きづらさからの回復が得られる。また、回復した参加者の一部は、新たな参加者の回復を支援したいと希望し、グループのコア・メンバーの役割を担うようになっている。本研究で得られた知見は、自助グループの成長を促す効果があると考えられた。

また昨今、全国各地でケアラー支援条例が制定される等、ケアする人(ケアラー)を社会で支える仕組みに注目が集まっている。精神障害者の配偶者に対する支援活動は、更なる発展の可能性があると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 前田 直	4. 巻 24(1)
2. 論文標題 精神障害者の配偶者が抱える困難と支援ニーズに関する現状調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神障害とリハビリテーション	6. 最初と最後の頁 72-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田 直	4. 巻 23(2)
2. 論文標題 福祉の現場から 精神障害者の配偶者への支援	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 80-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 前田直
2. 発表標題 精神疾患を持つ人の配偶者が経験する日常生活の変化と必要な支援
3. 学会等名 日本作業科学研究会第24回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷口恵子、前田直、横山恵子、蔭山正子、酒井佳永
2. 発表標題 “忘れられた介護者” から見た精神障がいと子ども虐待～家族の思いに寄り添った支援の在り方を考える～
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第25回ひょうご大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------